

一般A日程入学試験

学力特待生入学試験（A日程）

入学試験問題

国語

注意事項

1. 願書提出時に、この試験科目の受験を申請していない人は受験できません。
 2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
 3. 解答は解答用紙の解答欄にマークしなさい。
 4. 解答用紙にある「マーク記入例」と「記入上の注意」をよく読みなさい。
 5. この問題冊子は、十三ページあります。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『万葉集』の編さん者は、『古今和歌集』や『千載和歌集』の編さん者たちとは、言葉にたいして、だいぶ違った感覚をいだいていたようだ。後世の和歌集は、これは現代風の歌集ですよとか、すぐれものをピックアウトしました、というような、いまでも通用するような編集者の感覚で、歌を集めている。ところが、『万葉集』の場合はそうではなく、言葉というものにたいする深い **I** な「^①はじまりの感覚」が、潜在している。近代人が「万葉ぶり」などといって詠んだ歌が、なかなか古代の『万葉集』に届かなかった理由は、どうもそのへんにありそうだ。

歌というのは、言葉をもって編まれ、言葉によってつくりだされたものであるという事実にたいする、深い驚きが、そこには生きている。もつというところ、人間は言葉というものを、こんなふうを整えることができ、こんなふうを整えてみると、それは不思議な力を帯びはじめる、言葉は人が語りだすものだけれど、うまくするとそれは宇宙的な性質を帯びることにさえる、という驚きの感覚が、『万葉集』には、生き生きと残されている。『万葉集』という **II** は、だからたんに同時代に知られていた歌を集めた、というよりも、歌にこめられたそういう不思議な力を、一冊に集めてみた、という生々しい意味を持っていたように、感じられるのだ。

その言語感覚は、「言霊」という言葉に、凝集してみることができる。言葉はたんなる、人と人とのコミュニケーションの道具ではなく、もつと不思議な霊力をそなえている。言葉は、それ自身が霊力を持っているのだ。そのために、この歌集におさめられた歌を詠んでいる人々が生きていた世界では、誰もが言葉というものを、いまでは考えられないような丁寧さや繊細さをもって、とりあつかっていたのである。

とくに、柿本人麻呂はそのことを強く意識していたようだ。彼は直接に「言霊」を主題にした歌をつくっている。

磯城島の日本の国は言霊の幸はふ国ぞま幸くありこそ

言霊の八十の衢に夕占問ふ占正にのる妹はあひ寄らむ

これらの歌では、ふたつの点が注目される。ひとつは、同じ「ことだま」が、『万葉集』の中で、「言霊」と「事霊」という、ふたつの表記法であらわされているということだ。これは、言葉で言うこと、言われたことである「言」と、なされること、実現したことである「事」とが、同じ「霊」というものの影響下にある、という考えがあつたことを、しめしている。もうひとつは、この「ことだま」が、「幸はふ」とか「ま幸く」とか「八十の衢」とかの言葉に関係を持つている。つまり「ことだま」は、充いつ、多様、ゾウシヨク、豊かさなどの感覚に結びついているらしい、ということである。霊の力は、言と事に影響をあたえ、この世の富や幸や生命を、ゾウシヨクさせることができるのだ。

このふたつの歌には、世界の背後にあつて、あるいは世界をつらぬいて動き、流れているものの実在が、生々しく感じとられていくことがわかる。「たま」という言葉で表現される「なにか」が、「さきはふ」ようにして、この世を覆いつくし、つらぬきながら、流動しつづけている感覚である。その流動体は、ときどきたちどまつては、この世にさまざまな現象（事）をつくりだし、人の心を動かして、言語の現象（言）となつて、世界にあらわれる。そして、その「なにか」が流動しつづけているときには、人の共同体には豊かななごやかさが、もたらされるのだ。霊は流動しつづ、あらゆるものに、ヘンタイをとげていく。だから、霊が活発に動いていくときには、人の世界には豊かで多様な、現象や生命や物が出現してくることになる。『万葉集』の詩人たちが意識していた、「日本」という言語の共同体は、そういう「たま」の充ちあふれた世界だったのである。

歌の発生も、この流れ、動く「なにももの」かの実在感と、深く関係している。事や言の中には、流動する霊の力がこめられている。しかし、事も言も、そのままではどんよりと固まつて、動きを失つたものに変化していつてしまう。事がたんなる過去のありふれた記憶になつてしまつたり、言がセイサイや驚きを欠いた日常の言葉になつていくと、その中にこめられていた流動する力も、こわばつて動かなくなつてしまう。『万葉集』の時代の日本人は、そんなふうにして世界が動きをなくしていくことを、恐れていた。この世の豊かさや幸いは、霊が大いなるジュンカンをおこない、宇宙の中をジュンカンしていくときに、はじめてもたらされてくるものだからだ。霊に流動をとりもどさせる必要がある。霊を揺すり、霊を励まして、偉大なるジュンカンが立ちおこらなければならぬ。

そこで、事と言における、さまざまな古代的な「定式」というものが、発生してくるようになったのである。定式という

のは、**Ⅲ**の別名だ。空間や時間の感覚を、同じ周期で刻んで、それを反復させることの中から、定式は生まれる。身体の動きに定式をあたえれば、そこにはダンスが生まれる。言葉の流れを定式化すると、**インリツ**が生まれる。事と言とに、こうして歌が発生することになる。**Ⅲ**を持った身体は、事にこめられている霊の力に、動きと流動をとりもどさせる。歌のインリツは、言葉の中でかじかんでいた「言霊」を揺すり起こして、ふたたびそれを、流動する宇宙的な「なもの」かに、合流させていく。踊る身体や、インリツをもった言葉は、定式の力をかりて、「ことだま」を流動化させようとしている。そして、それが実現すると、宇宙的な霊がジュンカンをおこして、生命のゾウシヨクやもろもろの幸いが、人の世界にあらわれてくるようになるのである。

このような古代人の考え方は、現代の私たちのもの考え方とは、まったくつながりがないようにも思える。**A**の魔力が、現実の世界を変化させたり、よい歌がたくさん生まれると、それだけ世界には幸いが実現されるだろう、などという考えを、現代人はもうまともに受け取らなくなっている。呪術や宗教なんか、人間の世界を豊かに幸せにしたりするわけがない、物質的な富や豊かさは、合理的な思考法と生き方だけが、もたらしてくれ、と考えて、現代人は『万葉集』を、たんなる過去の文化財として、あつかおうとしている。だが、もつとよく考えてみると、古代の「ことだま」思想と、現代の市場経済社会の原理とのあいだには、じつは驚くほどの類似性が、存在しているのだ。

古代人にとって、霊はいわば「無の流動体」^②として、考えられている。この「無」は、あらゆるものに、ヘンタイするところができる。そして、あらゆるものにヘンタイしながら、それはいつさいの「有」をつくりだすのである。無定形で、あらゆる現実の事と言に姿をかえていくという、この「霊」は、驚くほど私たちの「貨幣」に似てはいないだろうか。貨幣もそれ自体としては、「無形の流動体」にほかならない。そのかわり、それはこの商品社会の中で、ありとあらゆるものに、姿をかえることができるのだ。いや、むしろ、そうやって姿をかえ、みずからをヘンタイしていくたびに、貨幣は自己を実現していく。貨幣は交換されるたびごとに、別の商品に姿を変えていく。そして、そのヘンタイが社会の全域において、活発におこなわれていると、私たちの世界は、それを豊かさの実現としてとらえるのだ。

古代人のことを、霊による**B**者と呼ぶべきなのか、現代人のことを、貨幣による**C**者と呼ぶべきなのか、いずれにしても、ふたつの異なる世界は、豊かさや幸福ということに関して、きわめて似かよった思考方法を、愛好している

のだ、ということがわかる。どちらの世界も、自分たちが生きている世界の背後に、流動する「なにもの」かの実在を感じとっているのだ。『万葉集』の世界では、その「なにもの」かは、目に見ることのできない、また手につかんで確かめることもできない「霊力」として、とらえられていた。その霊が人の世界に豊かさや幸いをあたえているのだから、人々は正しい定式をもった生き方や表現が、大切だと感じていたのである。

現代人も、自分たちの生きている世界が、地球的な規模で流動しつつある「なにもの」かの力によって、突き動かされていることを、はっきりと感じとっている。その「なにもの」かは、しかし、そこではそれぞれの貨幣として表現されている。人々はそれを手でつかむこともできるし、数字として確実に保存したり、貯蔵することもできるようになっている。もともと貨幣という現代の「言霊」は、まったくの無から発生してきたものではない。それは、もともと有る商品という富の中から、発生してきたものだ。つまり、それは「有」の中から発生してきた、偽りの「無」にはかならない。この偽りの「無」が、市場 **IV** の中を、流動していきながら、いたるところで物質的なヘンタイをおこしていく、その **V** が活発に活動しているとき、現代人は生活の豊かさや確実さを、実感していくことになる。そして、そこでは不思議なことに、歌の力は確実に失われていくのである。

人間は、たかが千年くらいでは、たいして変化しない。言霊の実感に生きる『万葉集』の詩人たちの思考法と、**D** の魔力とともに生きる私たちの世界の間には、そう思われているほどの違いはない。それくらい思い切ってみることによって、私たちは『万葉集』の中に、未知の豊じょうを発見することができるかもしれないのである。

(中沢新一『日本文学の大地』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。)

問一 傍線部㉔㉕の漢字の読みとしてもっとも適切なものを、それぞれの中から一つずつ選びなさい。

(解答番号

㉔

1

㉕

2

㉖

3

㉗

4

㉘

5

)

問二

傍線部⑦く⑧の片仮名の太字箇所を用いる漢字としてもっとも適切なものを、それぞれの中から一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| ⑦ | 刻 | ⑧ | 揺 | ⑨ | 欠 | ⑩ | 覆 | ⑪ | 編 |
| [1] | た | [1] | さ | [1] | か | [1] | そ | [1] | つ |
| [2] | す | [2] | む | [2] | ひ | [2] | わ | [2] | あ |
| [3] | む | [3] | こ | [3] | さ | [3] | お | [3] | も |
| [4] | の | [4] | ゆ | [4] | わ | [4] | は | [4] | ふ |
| [5] | ぞ | [5] | な | [5] | つ | [5] | さ | [5] | う |

(解答番号

⑦ || **6**、

⑧ || **7**、

⑨ || **8**、

⑩ || **9**、

⑪ || **10**)

問三

I く V を埋めるのにもっとも適切なものを、それぞれの中から一つずつ選びなさい。

(解答番号

I || **11**、

II || **12**、

III || **13**、

IV || **14**、

V || **15**)

- | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|------|
| I | く | V | ① | ゾウシヨク | ② | ヘンタイ | ③ | セイサイ | ④ | ジュンカン | ⑤ | インリツ |
| [1] | シニカル | [1] | マジカル | [1] | サイバル | [1] | タイム | [1] | リズム | [1] | イズム | [1] |
| [2] | ライム | [2] | リズム | [2] | タイム | [2] | イズム | [2] | シニカル | [2] | マジカル | [2] |
| [3] | リズム | [3] | タイム | [3] | イズム | [3] | シニカル | [3] | マジカル | [3] | サイバル | [3] |
| [4] | タイム | [4] | イズム | [4] | シニカル | [4] | マジカル | [4] | サイバル | [4] | タイム | [4] |
| [5] | イズム | [5] | シニカル | [5] | マジカル | [5] | サイバル | [5] | タイム | [5] | リズム | [5] |

- IV [1] システム [2] カスタム [3] ミニマム [4] ポツダム [5] ランダム
 V [1] ストレス [2] アキレス [3] バランス [4] ニアミス [5] プロセス

問四

A [] D [] を埋めるのにもっとも適切なものを、それぞれの中から一つずつ選びなさい。

(解答番号 A [] 16 []、B [] 17 []、C [] 18 []、D [] 19 [])

- | | | | | | | | | | | |
|---|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|
| A | [1] | 生命 | [2] | 宇宙 | [3] | 言語 | [4] | 身体 | [5] | 時間 |
| B | [1] | 資本主義 | [2] | 世界主義 | [3] | 商品主義 | [4] | 社会主義 | [5] | 市場主義 |
| C | [1] | 愛好主義 | [2] | 幸福主義 | [3] | 文化主義 | [4] | 言霊主義 | [5] | 自分主義 |
| D | [1] | 貯蔵 | [2] | 流動 | [3] | 地球 | [4] | 貨幣 | [5] | 物質 |

問五

二重傍線部①・②について述べた文章で、もっとも適切なものを、それぞれの中から一つずつ選びなさい。

(解答番号 ① [] 20 []、② [] 21 [])

① はじまりの感覚

- [1] 歌というものは不思議な力を持ちはじめ、人間の世界を作り替えていく生き生きとした生命力を帯びているという心的現象。
 [2] 歌というものは不思議な力を発揮して霊力を持ちはじめ、考えられないようなことを体験できるとい
 う恐ろしい心的現象。
 [3] 歌というものは言葉によってつくりだされたものであり、宇宙的な性質を帯びることにさえなるとい
 う驚きの心的現象。
 [4] 歌というものは言葉によって始められるものであり、言葉でしか完結しないし、通用しないという絶

対的な心的現象。

- [5] 歌というものは言葉によって確かめられるものであり、人間が手にすることのできる痛々しい記憶を呼び覚ますという心的現象。

② 無の流動体

- [1] 無定形であり、ありとあらゆるものに姿を変えながら、姿を自然に消滅する運命にあるもの。
[2] 無定形であり、あらゆる現実の事と言に形を変えながら移り変わり、「有」をつくりだすもの。
[3] 無定形であり、すべての豊かさの実現として、最終的に「貨幣」にかわる可能性をもつもの。
[4] 無定形であり、商品社会の中で、ありとあらゆるものに姿を変えながら、商品になるもの。
[5] 無定形であり、みずから姿を変えることによって、別の商品になり、豊かさを実現するもの。

問六

『万葉集』についての概要で、**a**と**i**を埋めるのにもっとも適切なものを、後の解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号	a		22	、	b		23	、	c		24	、	d		25	、	e		26	、	f		27	、	g		28	、	h		29	、	i		30)
-------	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---	---	--	-----------	---

『万葉集』は現存最古の和歌集で、順次編集されたものを**a**（七一七？～七八五年）が最終的に整えたと考えられている。

おもな歌人は額田王（飛鳥時代の天武天皇の后）・柿本人麻呂（七～八世紀 宮廷歌人として皇室を賛美した歌が多い）・**b**（六六〇～七三三年？ 苦しい生活体験や妻子に対する愛情を詠んだ）などである。歌の形式には**c**・**d**・**e**などがある。**c**は五・七・五・七・七音、**d**は五・七・五・七と何度か繰り返され、**c**形式の反歌が添えられることが一般的である。**e**は五・七・七を二度繰り返す。また、歌の内容が

ら **f** (恋の歌) ・ **g** (哀悼の歌) ・ **h** (旅や四季などの歌) に大別される。

『万葉集』は和語が一音ずつ漢字で表記された、いわゆる「**i**」で書かれている。その漢字はカタカナ、ひらがなのものになった。

- | | | | |
|----------|-----------|----------|--------|
| [1] 短歌 | [2] 挽歌 | [3] 万葉仮名 | [4] 雑歌 |
| [5] 山上憶良 | [6] 旋頭歌 | [7] 古代仮名 | [8] 長歌 |
| [9] 相聞 | [10] 大伴家持 | | |

問七 本文の内容と合致しないものとしてもっとも適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

(解答番号

31)

[1] 言葉はたんなる、人と人とのコミュニケーションの道具ではなく、なお一層不思議な霊力をそなえ、それ自身が霊力をもっている。

[2] 『万葉集』におさめられた歌を詠んでいる人々が生きていた世界では、誰もが言葉というものを、いまでは考えられないような丁寧さや繊細さをもつてとりあつかっていた。

[3] 『万葉集』の中で、「言霊」と「事霊」という二つの表記法がみられるのは、「言」と「事」とが、同じ「霊」というものの影響下にあるという考えがあったからである。

[4] 霊が活発に動くときには、豊かで多様な、現象や生命や物が出現し、『万葉集』の詩人たちの「日本」という言語の共同体は、「たま」の充ちあふれた世界だった。

[5] 現代人は、物質的な富や豊かさは、合理的な思考法と生き方だけではもたらされないと考え、『万葉集』を過去の文化財としてあつかおうとしている。

①は天智天皇が内大臣藤原鎌足に御言葉を下し、春山のあでやかさと秋山の美しさを競わせた時、額田王が和歌で判定した歌、②は山間を出て、湖畔の近江国に遷都する時、額田王が作った歌、③は②の反歌、④は天智天皇が蒲生野で遊獵した時、額田王が作った歌、⑤は皇太子（大海人皇子）が額田王の歌に対してお答えになった歌である。これらの歌を読んで、後の問いに答えなさい。

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶と秋山千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王、歌を以て判る歌

① 冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山をしみ 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてぞ嘆く そこし恨めし
秋山ぞ我は

額田王、近江国に下る時に作る歌

② 味酒 三輪の山 A 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積もるまでに つばらにも 見つっ
行かむを しばしばも 見さけむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや

反歌

③ 三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらかなも 隠さふべしや

天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌

④ B 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

⑤ 皇太子の答ふる御歌 明日香宮に天の下治めたまひし天皇、諡を天武天皇といふ
 紫草の ^{むらさき} にほへる妹を ^b 憎くあらば 人妻故に ^お 我恋ひめやも ^c

(『万葉集』巻第一による。ただし、出題に際して字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。)

【注】 天皇…天智天皇(六二六〜六七一年)。天皇親政を実現するため、六四五年、鎌足とともに「大化の改新」を断行。大陸文化に学び、律令制国家の建設を目指した。

額田王…生没年不詳。齐明天皇時代に活躍が認められる初期万葉の代表的な女流歌人。天皇の代理として、あるいは群臣の代弁者として、歌を詠む専門的な宮廷歌人の最初である。

遊獵…五月五日、狩の衣服を整えて山野に出て葉草や鹿茸を採集する行事。

皇太子…大海人皇子、天智天皇の同母弟である。後の天武天皇(？〜六八六年)。『日本書紀』によれば、額田王は大海人皇子の愛を受け、十市皇女を生んでいる。

問一 傍線部ア、オの動詞の活用の種類としてもっとも適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。同じものを繰り返し用いてもよい。

(解答番号 ア|| 32、イ|| 33、ウ|| 34、エ|| 35、オ|| 36)

- | | | |
|------------|------------|------------|
| [1] 四段活用 | [2] 上一段活用 | [3] 下一段活用 |
| [4] 上二段活用 | [5] 下二段活用 | [6] カ行変格活用 |
| [7] サ行変格活用 | [8] ナ行変格活用 | [9] ラ行変格活用 |

問二 傍線部 a、b、c の助動詞の意味と活用形の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。同じものを繰り返し用いてもよい。

(解答番号 a || 、 b || 、 c ||)

- | | | |
|-----------------|----------------|----------------|
| [1] 過去・連体形 | [2] 過去・連用形 | [3] 完了(存続)・連体形 |
| [4] 完了(存続)・已然形 | [5] 完了(存続)・連用形 | [6] 打消・連体形 |
| [7] 推量(意志)・連用形 | [8] 過去・已然形 | [9] 推量(意志)・已然形 |
| [10] 推量(意志)・連体形 | | |

問三

A

を埋めるのにもっとも適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

(解答番号

)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| [1] くさまへら | [2] あざぢふの | [3] ももしぎの | [4] あをによし | [5] たまたすき |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|

問四

B

を埋めるのにもっとも適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

(解答番号

)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| [1] あらたまの | [2] しろたへの | [3] あかねさす | [4] ちはやぶる | [5] ひさかたの |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|

問五 ①の歌で、秋の短所について述べている部分で、もつとも適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

(解答番号

42

)

- [1] 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ
- [2] 咲かざりし 花も咲けれど
- [3] 山をしみ 入りても取らず
- [4] 黄葉をば 取りてぞしのふ
- [5] 青きをば 置きてぞ嘆く

問六 ①の歌で、額田王が自分の判定を皆に示すために、間を置いたと考えられる部分で、もつとも適切なものを、次の

中から一つ選びなさい。

(解答番号

43

)

- [1] 「鳴かざりし」と「鳥も来鳴きぬ」の間
- [2] 「花も咲けれど」と「山をしみ」の間
- [3] 「入りても取らず」と「草深み」の間
- [4] 「取りてぞしのふ」と「青きをば」の間
- [5] 「そこし恨めし」と「秋山ぞ我は」の間

問七 『万葉集』と成立の時期がもつとも近い詩歌作品を、次の中から一つ選びなさい。

(解答番号

44

)

[1]

古今集

[2]

懷風藻

[3]

山家集

[4]

古事記

[5]

癸心集